

地域連携による課題探究学習研究会 遠野サミット

第5回 特別編

取材・文／江森真矢子 取材協力／産業能率大学



身近な課題に取り組み生きる力を育む

地域課題解決型キャリア教育

地域課題に向き合う学習が広がり始め、効果的な学習のための方法論とともに、課題も見えてきました。今回は特別編として、4校が事例発表を行った研究会の取材を通して改めてその意義やより良い方を探ります。

今年9月、刈取り前の稲穂が光る岩手県遠野市に、全国から教員が集まった。遠野サミットと名付けられた研究会では、次期学習指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」を実現するための方法論として、地域連携による課題探究学習を提案（図1）。今号では研究会のなかでも4校の事例紹介セッションをレポートするとともに、実践上の課題を考察したい。

事例は学校全体で取り組んでいるものも、課外での有志参加のものもあり、方法はさまざま。地域連携の多様な可能性が感じられるが、共通項は単に地域に出ていくだけではなく、探究のプロセスが埋め込まれていることだ。発表者からは、生徒の社会参画意識が芽生え、学習意欲や主体性が育つこと、探究のプロセスを通して情報の扱いや他者との協働、表現などのスキルが磨かれること、さらに、大人や社会と関わることでキャリア意識の形成にも効果があることが異口同音に語られた。

レポート 1

可児高校の発表から学ぶ実践の必然性

岐阜県立可児高校の浦崎太郎先生はスクリーンを背に、地域社会の現状とこれから求められる力をふまえ、今、学校が地域連携に取り組む必然性を力説した。

地域コミュニティの希薄化、教育力低下により、学校が引き受ける負担が増大しているという問題意識をもつていた浦崎先生。「社会形成姿勢」を学校で育てることが、地域、ひいては学校自身の衰退を防ぐことになる、そう考え生徒を地域に向かわせた。市役所で働く可児高OBに声をかけることから始め、有志の生徒が課外で大人と活動を共にする場を作ってきたが、昨年度から1学年の行事として地域課題解決に取り組む大人と対話する場を作った。理想は「地域主催のまちづくりの場に高校生が参加する」形にすること。NPO縁塾を立ち上げてコーディネート実務を委

図1 遠野サミット概要

● テーマ
地域連携による課題探究学習研究会

● ねらい
「主体的な学びを推進するアクティブラーニングによる探究学習を考える」
次期学習指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善の方法論として、探究的な学習の方法論や、その教科教育への活用や転換について検討する。

事例紹介およびワークショップ分科会

分科会	内容	講師
1	岐阜県立可児高校の取り組み	浦崎太郎先生
2	島根県立隠岐島前高校の取り組み	常松 徹校長、中村 怜詞先生
3	宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校の取り組み	西山正三先生
4	岩手県立遠野高校の取り組み	助川剛栄先生、菊池陽一朗氏、安宅研太郎氏

● 日時
2016年9月24日(土)13:30~20:45 (懇親会含む)
2016年9月25日(日)9:00~12:00

● プログラム
<1日目> オリエンテーション
【セッション1】 事例紹介およびワークショップ① 100分
【セッション2】 事例紹介およびワークショップ② 100分
【セッション3】 遠野市のまちづくり再生に高校と連携した意図と思い30分
遠野市副市長 飛内雅之氏
【セッション4】 懇親会
<2日目>
【セッション5】 新たな学習課題を開発する 100分

新たな学習課題を開発する分科会

分科会	内容	講師
1	復興ボランティア学ワークショップ	石巻専修大学 山崎泰央先生 石巻専修大学・産業能率大学 学生
2	地域課題探究学習の課題探索ワークショップ(アクションラーニング)	産業能率大学 皆川雅樹先生

ねる仕組みを整えた。

「子どもを取り巻くありとあらゆる関係者がつながり、皆が教育の主体になる」。教育を学校任せにしないことが今後目指す方向性だと語ると、会場に共感が広がった。

レポート 2

参加者も体験
隠岐島前高校の「地域学」

「今日は皆さんに地域学を体験してもらいます」。常松徹校長による魅力化プロジェクト説明の後に登壇したのは、中村怜詞先生。



まずは隠岐島前の現状をデータで示し、なぜ若者は帰ってこないのかをグループで話し合う。「愛着がないからではないか」という意見には「愛着ないですか?」「なぜ?」とツツコミを入れたり、関連する情報を与えながら全体で共有。次は、強みは何かについて。大事なのは課題を課題と認識したうえで、目の前にある資源や価値を生かすこと。メインのワークは隠岐島前に人を呼び込む策を考えることだ。1人観光客が来ると誰が収益を上げるのか? 年間の観光客数は? 他地域と比べて隠岐が勝るポイントは何? ここでもデータや事例を示しながら話し合いと共有を重ねる。最後は客足の落ちる冬に観光客を呼び込むプランを考えた。

地域学は学習編と実践編からなり、S.T.A.D.(See - Think - Plan - Do)のサイクルで進めるのが特徴だ。まず現実を見る、知る、それから考え、計画したことを実践する。考えてばかりで外に出ないとうまくいかない。このサイクルを授業から大きなプロジェクトまで3年間で何度も回すのだ。

レポート 3

SGHでさらに進化する
五ヶ瀬中等教育学校

遠野からは一番遠い宮崎県五ヶ瀬

から来た西山正三先生は、訥々と、時にユーモアを交えながら1時間半語りきった。同校ではSGHに申請するにあたって「ローカルから野性味あふれるグローバルリーダーを育成すること」を目標とした。課題研究とスキルを学ぶグローバルリーダー・トレーニングを2本柱とするが、スキルは課題研究にも生かされる。

生徒に伝えているのは「課題研究は社会的、学術的発展のために行われるべき」という考え方。個人の興味・関心だけでは続かない。個人の思いと社会の要請の重なる部分をテーマとするよう指導している。そして、知識だけではなく必ず体験すること、実際にやってみること。今年、五ヶ瀬を活性化するための生徒の自主的活動団体「GK課(五ヶ瀬を活性化)」も生まれ、生徒の動きはますますダイナミックになっている。

イギリス、バン格拉デシュ、モンゴル、フィンランド、ローマと世界にも研修・フィールドワークの場を広げつつ、11月に地元、五ヶ瀬で開催した「グローバルシンポジウム - N 五ヶ瀬」では地域課題を扱う。全生徒が参加して役場や森林組合などから大人を招き、グループディスカッションを行った。身近にある異文化に気づくこともグローバルへの入り口だと考えているからだ。

島根県立隠岐島前高校の取り組み

Column 2

島外、県外から積極的に生徒を受け入れ、全学年1学級にまで減った生徒数が15年前の水準にV字回復という結果をもたらした隠岐島前高校の魅力化プロジェクト。地域づくりと人づくりを一体化して「地域の未来を築く人財の育成」掲げる同校の取り組みは、現在第2期に入っている。

1~2年次の総合学習「夢探究I」「夢探究II」では「自分のやりたいこと」かつ「地域や社会に貢献できること」でもある夢(志)を描く。今年度からスタートした「地域生活学」は1年次の家庭基礎(2単位)保健(1)、2年次の情報(2)保健(1)総合的な学習の時間(1)を統合し、各科目で重複する部分の時間を探究学習に充て地域課題解決に取り組んでいる。

さらに深めたい生徒は3年次で学校設定科目「地域地球学」を選択し、地域や地球規模の課題を考えながら、課題解決に取り組む。昨年度、SGH指定校となってからはシンガポール、ブータン、ロシアなど海外での学習も充実させグローバル視点を強化してきた。

小誌Vol.404(2014.10)掲載

岐阜県立可児高校の取り組み

Column 1

地域の諸団体や行政と連携して、地域課題解決型キャリア教育を行っている。昨年からは、学校と地域をつなぐNPO縁塾がコーディネートし、まちづくりに生徒が参加する場を用意。1学年の夏には全員が、興味のある活動をしている大人たちと対話する「OPENエンリッチ」に参加。2、3学年では有志生徒がさまざまなプロジェクトに参加。

扱うテーマは「地域医療」「防災」「政治参加」「耕作放棄地解消」「多文化共生」など。活動例としては医師や市職員など複数の専門家と高校生が、地域課題について解決方法を考えるIPE(InterProfessional Education=多職種間連携教育)や、市議会や市選管職員等と共に生徒向け模擬選挙プログラムの企画運営したことなどがある。これらの活動を通して生徒の学習意欲、キャリア意識、郷土愛が向上したとの手応えを得ている。

市議会では、意見書の形で提案された高校生のアイデアを行政側に伝え、今後のまちづくりに生かすことを企画し連携している。

小誌Vol.404(2014.10)掲載

市役所、建築家、遠野高校の 鼎談に連携のあり方を見る

遠野高校のセッションは助川剛栄先生とともに市役所職員の菊池陽一朗さん、建築家の安宅研太郎さんが並んだ。生徒が地域に出て探究的な活動をする機会が多くあるが、学校主催のものはほとんどないのが特徴。参加する活動のなかでも「遠野オフキャンパス」は建築家の発想で遠野の魅力と独自性を見出し、発信するユニークなものだ。

「このプログラムは何をやっているのかよくわからないと思うんです。やっている私たちもゴールがみえない」と安宅さんは言う。受けた助川先生も「めあてがないのがいいんです。参加した生徒からは教師の枠にはまらない



発想が出てきます」。専門家にもまだわからないことを高校生も一緒に探究する。答えがわからないからこそ面白い。主催側からは「市としては人材育成であり、地域づくりの一環のつもりです。でも私自身、そして地域の人たちも高校生と出会うことができなくて良かったと思っています」と菊池さん。3人の和気あいあいとした掛け合いからもしやかな連携の姿が伝わってくる。依頼は電話とメールだけ、文書は不要。大事なことは「正直なところを話し合う」「お互い無理ない範囲でやる」こと。教員の引率は求めず、なにかあれば周りの大人がフォローする。そんな関係ができています。

まとめ

見えてきた課題と 地域連携の未来

神奈川県から来た先生は、今回の参加動機をこう語った。「アクティブ・ラーニングの導入が言われていますが、つけるべき力や主体性を育てることは、学校の中だけでは難しいと感じていました」。打開のためのヒントを求めて参加したが、今回学んだのは教員がまず共通認識を持つ必要性だということです。

「先進事例を外から見ると、誰でも回せるようにプログラムが完成し、う

まくいつているように思っていました。ですが、実際の現場ではいろいろな矛盾や難しさを抱えている、当たり前だけれど、今も試行錯誤しながら進んでいることがわかりました。本校では、まず教員がアクティブに、学校の課題はなにか、生徒にどんな力をつけるのか、そのためにどうするかを探究すべきと思っています」

まだ解決しない実践上の課題

質疑応答では参加者からの実践上の懸念点や心配な点も多く挙がった。有志参加を学年全員参加に切り替えた可児高校では、手続き・ルールの策定、財源の確保や、警報発令時や事故など非常事態に対応する体制の整備の重要性を痛感したという。外部との連絡調整に時間と手間がかかるという問題については、NPOへの業務委託で解決に向かいつつあるが、学校の教育活動・管理の範囲をどう設定するかなど未解決の課題がある。また、行事をきっかけに生徒が地域活動に参加するのは望むところだが「生徒の学校外での地域参加にどこまで関与するのか?」「課外活動と地域活動はどちらが優先するのか?」「そもそも高校生の時間は誰のものか?」といった悩みも生まれている。

岩手県立遠野高校の取り組み

Column 4

地域の伝統校、遠野高校では、遠野市が地域の豊かな未来をつくるための新しい手法として、建築家などに委託して実施している「遠野オフキャンパス」に有志の生徒を参加させている。内容は、中心市街地にある旧商家の調査や再生活動、町並み調査や、豆腐店や味噌屋などでのインタビュー。馬とともにあった遠野の暮らしを捉え直すワークショップなど、地域をキャンパスとして年に数回開催されている。主催・企画側も「先が見えない」「やりながら考える」。ただ一流の研究者が探究心を掻き立てられる素材に関わる諸活動。その様子を記録し発信することも含め、高校生が東京からの大学生や大人と共に動いている。

参加は、地域の職業人の話を聞く進路行事「ミニ講座」に市役所職員を招いたことから縁ができ、市役所側からの呼びかけで始まった。参加した生徒は、具体的な体験から進路意識や主体性が育ち、大人との対話によって思考力や発信力が鍛えられ、生徒指導的観点からもしっかりするので「結果的にキャリア教育になっていた」と助川先生は言う。

小誌Vol.410(2015.12)掲載

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校の取り組み

Column 3

宮崎県の中山間地域に位置する五ヶ瀬中等教育学校は、1994年の開学当初より周囲の森林など地域を学習のフィールドとしてきた。総合的な学習の時間「フォレストピア学習」でも、農業体験や環境学習などに取り組んできたが、2014年度のSGH指定を機に「グローバルフォレストピア学習」に進化。より探究的な学習にシフトした。

中1、中2では「ローカル学」として最初は年間を通した稲作体験、竹細工や餅つきなどの体験活動、2年目には農作業とともに各自のテーマで探究活動を行う。中3からは「グローバル学」としてまずディベートや統計などの手法を学びつつグローバルな社会課題についての講義を受ける。高校に上がると地域課題とグローバルな社会課題が結びつく「環境」「経済格差」「高齢化」などをテーマに、調査、研究、ポスターセッションを行う本格的な探究活動に入る。高2では探究の成果を基に実践をし、その結果を再び考察、日本語論文を仕上げ、高3では英語サマリーの作成、海外研修先での発表などを行う。

小誌Vol.403(2014.7)掲載



隠岐島前高校 校長
常松 徹先生



隠岐島前高校
中村 怜詞先生



遠野市役所
菊池 陽一朗氏



遠野オフキャンパス講師
建築家
安宅 研太郎氏



可児高校
浦崎 太郎先生



五ヶ瀬中等教育学校
西山 正三先生



花巻北高校
進路指導
助川 剛栄先生
(元遠野高校)

隠岐島前高校の「地域学」を体験するワークショップの中には「地域学の課題を考える」というワークもあった。参加者からは「学校と地域の、成果についての意識の違いは埋められるのか」「教師側に伝えたいものがしっかりとないと難しいのではないか」「教師と地域の距離を縮めるのに時間がかかるのでは」といった指摘があったが、確かに初年度の中村先生の多忙感はずいぶん大きかったという。継続していくうえで教育スキルの継承と向上や、何年も続けると新しいテーマが生まれにくいことも悩みだ。「結局、毎年毎年、少しずつ変えながらやっていきます」

「同じく「教える人がいない」ことを課題としていた五ヶ瀬中等教育学校では、誰でも教えられるようなテキストの必要性を感じて啓林館が作成している『課題研究メソッド』の企画編集にも携わり、近く出版される予定だ。

初期に挑むべき課題があるのは当然だが、実践を積み重ねれば、そこでまた新たな課題が見つかる。地域連携をすると関係者が増え、複雑度が増すとはいえ、教科の授業改善とプロセスは共通するのではないだろうか。

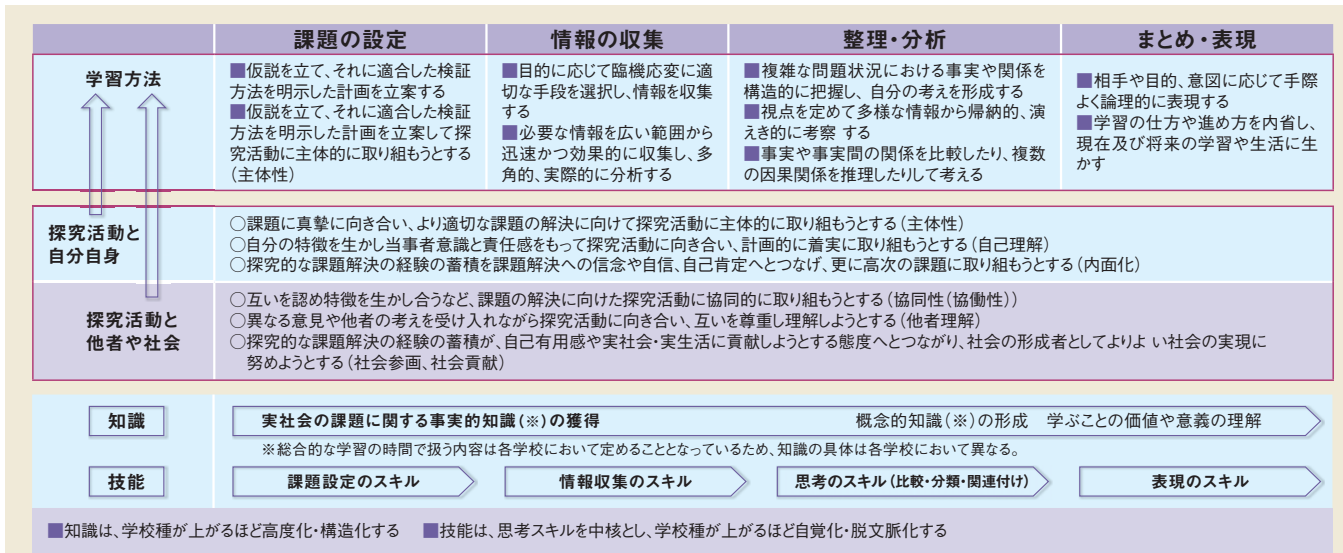
地域連携は未来の学びの姿

次期学習指導要領で「総合的な学習の時間」は「総合的な探究の時間」への名称変更も含めた見直しを検討されている(図2)。学びの過程についての考え方には「探究のプロセスを通して(略)各教科等の「見方・考え方」を総合的(統一的)に活用し、広範かつ複雑な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会や実生活の複雑な文脈の中で物事を考えたり、自身の在り方生き方と関連付けて内省的に考えたりする(略)児童生徒にとつては試行錯誤を繰り返すことによりこうした過程を行ったり来たりすることも重要であり、時には失敗したり立ち止まって前提を疑って考えることがあつてこそ探究的な学びである(審議のまとめより)」とある。

4校の実践はそれぞれ違うが、どれもここで描かれた姿そのものに見える。生徒にとつて、そして教師にとつても豊かな学びが、地域と連携した課題探究活動からは生まれそうだ。

2日目には「復興ボランティア学」および質問によって課題を明確化する「アクションランニング」のワークショップが行われ、発表した先生方も参加者とともに学び合った。

図2 次期学習指導要領における総合的な学習の時間の学びの過程のイメージ(高等学校)



中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」(2016年8月26日)より